

家族で乗り越えた半年間

名張市立桔梗が丘中学校2年 竹下 葵

二〇二四年六月。梅雨も終わりに差しかかり、私達の学校では期末テストが行われていた日でした。休み時間、友達と話していた時、急に担任の先生に、
「お父さんとお母さん、病院に行くみたい。」と告げられ、家の鍵を渡されました。私は、少し不安に思いつつ、その日はテストを終えました。帰宅すると家にはその日、父が職場で食べるはずだったお弁当と一通の手紙が残されていました。手紙には、

「お昼準備する時間無かったから、そのお弁当食べてね。」
と書かれていて、つのる不安を抑えながら、両親の帰りを待ちました。それから数時間後、両親が帰宅した時、二人の顔が心なしか暗い気がして、
「パパ、大丈夫なの。」

と聞きました。沈黙の後、母が

「パパ、肺に影があるみたい。でも、今行った病院じゃ詳しく検査できないみたいだから、他県の病院に行くことになった。」

と告げました。私は頭が真っ白になりました。

それから数日後、学校から帰宅し普段より少し重く感じる扉を開けると、母は泣いていました。母に現状、肺癌のリスクが高いと言われ、肺癌なら末期だと言われ、その日の夕方に癌細胞に針を刺して何の癌か検査したそうでした。祈りの一週間を過ごし、父方の親族一同が病院に集まって医師から確定した病名を告げられました。病名は、縦隔原発セミノーマ、ステージ三。医師からは、

「肺にできるのは十万人に一人の確率で、十センチ以上のため手術は難しいですが、抗癌剤がよく効く癌だから明日から頑張っていきましょう。」
と言われました。初めは末期かもしれないと言われていた癌が治ると診断されたことで、私達に希望の光が見えたのです。

ロビーのいすに座っていると、先生が近づいてきて、

「パパ、絶対大丈夫。結果出るまで不安だったね。絶対治るよ。」

と声をかけてくれました。私は、胸に張りつめていた糸が切れ、気づけば涙があふれていました。私達家族は抱きしめ合い、私と母の二人で、その日は病院を後にしました。それからは、父の闘病生活の始まりです。治療は、抗癌剤を七時間の五日間コース。それが終わると数日間退院というのを四回くりかえします。治療が始まってから父は、髪が抜け、体重が四十八キロまで落ち、歩くことすらままならない状態になっていきました。私はそんな父を見て、父はこんなにも闘っているのに何もできない無力な自分が悔しくて、ふがない気持ちでいっぱいでした。毎晩、悔しさのあまり涙を流しました。そんな私を支えてくれたのは友人達の存在です。友人 Y ちゃんは、南海トラフ臨時情報が出された時

「お父さんの事で頭がいっぱいかもだけど、水、スーパーから消えていってるよ。」

と教えてくれました。友人 J ちゃんは、千羽鶴を作って手紙と一緒に渡してくれました。その千羽鶴は今でも再発しないことを願い、寝室に飾ってあります。友人 T ちゃんとそのお母さんは、雨の日にお母さん大変だろうからと学校へ送迎してくれました。他にもたくさんの人達に支えていただき、私達は様々な人の温もりに触れることができました。その一つ一つに感謝して生きていきたいです。

そうして、月日は流れ九月。七月から始まった抗癌剤治療が無事終了しました。さらに、六週間後ついに、ペット CT の結果、当初十センチ以上あった腫瘍がゴミくず程度の大きさまで縮み、再発予防として十五回の放射線治療を終え、ついに十二月。全ての治療が終了しました。

この半年間、絶望から始まり少しずつ希望へと歩みを進める中で、たくさんの涙を流しそのたびにたくさんの人に支えられました。もちろん、その中には治療にたえながらも、いつも私の頭をなでてくれた父の姿や、一緒に隣で涙を流してくれた母の存在もあります。私はこの決して良いとは言えない辛い経験の中で、家族と居られるあたり前の日常の素晴らしさを知りました。

パパ、元気になってくれて本当にありがとう。